北海道浦河町「べてるの家」における「治療文化」に関する考察

— 「場所性」「歴史性」「周縁性」の観点から — (2)

早野 禎 二

A Study of "Treatment culture" in "Bethel House" in Urakawa, Hokkaido.

- From a Viewpoint of "Locality", "Historicity" and "Periphery" -

HAYANO TEIJI

前号掲載

- 1 場所性の概念
 - 1-1 現象学的な「場所性」概念
 - 1-2 テンニエスの「場のゲマインシャフト」
- 2 精神障害における「治療の場所」
- 3 中井久夫の「治療文化」論
 - 3-1 「治療文化論」の枠組み
 - 3-2 キリスト教の「治療文化」とシャーマンの「治療文化」
 - 3-3 治療関係における相互性と病者との「共存」
 - 3-4 「べてるの家」分析における「治療文化論」論モデルの有効性

本号掲載

- 4 アイヌ民族の文化と近現代史
 - 4-1 アイヌ民族の生活と文化
 - 4-2 アイヌと近現代の歴史
 - 4-3 アイヌの「イム」
- 5 北海道浦河町の近現代史
 - 5-1 入植期とアイヌの人びと
 - 5-2 キリスト教開拓団「赤心社」の入植とアイヌ
 - 5-3 アイヌ民族と朝鮮人のつながり
 - 5-4 大正から現代までの浦河町の歴史と産業

次号掲載予定

- 6 「べてるの家」の活動と歴史
- 7 「べてるの家」の「治療文化」
- 8 結論と展望

4 アイヌ民族の文化と近現代史

4-1 アイヌ民族の生活と文化

アイヌ民族は、本州北部から北海道、サハリン（樺太）、クリル（千島）列島に及ぶ広い範囲

で、言葉をはじめ固有の文化をもち、独自の歴史を歩んできた先住民族である。森の樹々や動物たちと対話し、自然と共生してきた⁽¹⁾。アイヌ民族は自分たちが住んでいた土地をアイヌシモリ（アイヌの静かな大地）と呼び、その自由な大地で狩猟・漁労・採集民族として暮らしてきた⁽²⁾。

アイヌ民族の食糧の80％は、採取植物であった。アイヌ民族は、アイヌシモリの大自然が破壊されるまで、農耕文化を必要としない独自の狩猟採集文化を持って暮らしていた。アイヌ民族は、自然と闘うとか克服するとかという不遜な心はなく、大自然の営みに逆らわず共生することを最高の生き方としていた。アイヌ民族は、人間が自然より優位でそれを支配できるものとは考えず、大自然の懐のなかに自分を置き、人間も自然の一部として互いにかかわりあって共生しようとした。大地も植物も動物たちも、人間が自由にできる所有物ではなく、神（カムイ）のものであると考え、いつも畏れと祈りをもって接した⁽³⁾。

アイヌ民族の生活、文化、世界観のすべては信仰を抜きにしては考えられないとされるが、特に火の神（アペフチカムイ）は人間に最も親しみやすい神として、その住まいも中央部に炉が切られ、火の神を中心に日常生活が営まれていた⁽⁴⁾。

また、アイヌ文化は、個別の文化要素としてではなく、アイヌ民族の代表的な祭儀であるイオマンテ（一般に「クマ祭り」と呼ばれる）を中心とする文化要素の集合体としてとらえる見方がある。イオマンテとは、人間の世界（アイヌシモリ）を訪れたクマやシマフクロウなど各種の動物を一定期間コタン（集落）で飼育したのち、神の世界（カムイモシリ）へ送り返すという儀式である。このイオマンテは、アイヌ社会の社会経済的な安定と定住集落の形成を基盤として成立していた。アイヌ民族の狩猟・漁労・採集民族としての高度な安定性の根本要因は、河川のサケ漁に依存した生活にあったとされる。サケの産卵場を中心に河川流域共同体としての定住集落群が形成された。近世のアイヌ社会は、サケ漁による定住的集落という社会的側面、交易品としてのクマ皮の外需や金属製品を中心とした物質の流入という流通経済的側面、イオマンテという宗教的側面が有機的に結合してあったとされる⁽⁵⁾。

アイヌの口承文芸のユーカラは、知里真志保によれば、語源は「ヤイエユカル」であり、それは「自分についてまねる」「自分の体験を演技する」という意味であり、古くはイオマンテなどの祭儀によって演じられた仮装舞踏劇が、のちにひとつの形態として確立したものではないかと考えられている⁽⁶⁾。

4-2 アイヌと近現代の歴史

アイヌの近世から近代にいたる歴史は、その狩猟採集民族としての生活・習慣・文化が和人によって破壊されていく歴史であり、和人による支配と抑圧の歴史である。それは伝統的なアイヌ社会が明治政府の「西欧化」政策のなかで、同化を迫られていく歴史でもあった。

■ コマンシャインの蜂起

アイヌ民族は、古くから海を越えて多くの異なる民族と接触し、交易活動を行っていた。しかし、15世紀になると、シャモ居住地に近い地域のアイヌの生産と生活の場は破壊され、対等な交易は崩れ、アイヌ民族に対する略奪の交易が横行するようになった。そのためアイヌ民族は各共同体が連合して蜂起し対抗した。1457年にはアイヌ民族とシャモ集団との最初の大規模な民族戦争であるコシャマインの蜂起が起きるが鎮圧される⁽⁷⁾。

■ 江戸幕府のアイヌ政策とアイヌ民族の抵抗

江戸時代、家康は、アイヌは松前藩以外と交易することを禁止し、松前藩に、対アイヌ交易の独占権の一部を上級家臣に知行として分け与えた。このような知行形態は「商場知行制」と呼ばれる。この「商場知行制」は、アイヌ社会に大きな打撃を与えた。商場は、交易の場から松前藩

による漁業経営の場に変質していき、アイヌ社会の基本的な基盤である漁場を奪った⁽⁸⁾。こうした松前藩による収奪に対し、1669年6月シャクシャインの蜂起が起きる。しかし、指導者のシャクシャインは謀殺され、乱は鎮圧される。「べてるの家」のある浦河町に近い静内町は、その指導者シャクシャインの拠点であり、砦の遺跡が残っている。

その後、松前藩は「商場知行制」から「場所請負制」に転換をはかる。「場所請負制」とは、商人に委託し、運上金を納める制度で、これによってアイヌ民族は、生産者としての交易相手から漁場労働者にされ、アイヌ社会は構造的な破壊を被ることになった⁽⁹⁾。場所請負人は、アイヌ人を強制的に遠隔地に移動させた。およそ働けるとみられた人々は、連行され、これによってアイヌ共同体は徹底的に解体されていった。また和人が持ち込んだ天然痘などが免疫性のないアイヌ社会に蔓延し、アイヌ人口の激減につながった。このような状況のために1789年クナシリ・メナシの蜂起が起きたが鎮圧される⁽¹⁰⁾。

■ 幕末の国防政策とアイヌ同化政策

幕末、幕府は、南下するロシアに対抗して、アイヌシモリを日本の領土と主張し、アイヌの同化政策を進めていった。それまでアイヌ民族には、農耕を禁じてきたが、穀食は「文明」であるという奨励を始め、肉食は「野蛮」であるとして禁ずるようになった。アイヌの固有名詞である名前も日本語式に改めさせられ、同化政策が進められる。

「日本人」化したアイヌは、「帰俗土人」とか「新シャモ」と呼ばれ、幕府は、褒章を与えて「帰俗」を奨励した。アイヌ民族の呼称の「蝦夷」から「土人」への変化は、アイヌシモリ（蝦夷地）の「異域」から「幕僚」へ、アイヌ民族の「異民族」から「領民」への政策転換と関連していた。これは、明治期以降の「旧土人」という呼称へとつながっていくが、それは、幕末の同化政策と明治以降の政府による同化政策の間に継承性があることを意味している⁽¹¹⁾。

■ 明治政府の開発・植民政策—アイヌの土地の無償没収

明治政府は、「土人」の住む「蝦夷地」は、北方の国防的軍事的観点から重要であるという認識を江戸幕府から受け継ぐとともに、新たに「蝦夷地」を「開拓」という方針を打ち出した⁽¹²⁾。1871年の開拓使布達によって、アイヌ人は、「旧土人」と統一された。開拓使の初代開拓次官に黒田清隆が就任し、北海道「開拓」の模範をアメリカ西部開拓に求め、アメリカから開拓顧問団を招いた。黒田のアイヌ政策は、同化政策であり、アイヌ民族の言語・文化・伝統を奪うものであった。またアイヌ民族の土地を無償で没収する法規を作った。それまでアイヌが就労、漁労、伐木していた土地であっても、シャモに分割し私有を認めた。これによって払い下げられた土地に1872年からの10年間に6万5000人の移民が北海道に入った。

1886年に北海道庁が設置されたが、そのときの施政方針で北海道の「開拓」政策を、従来の貧民の移住から「資本の移住」に転換することが明らかにされた。そして、北海道土地払下規則（1886）「北海道国有未開地処分法」（1897）によって広大な山林原野が無償で払い下げられ、北海道に大土地所有制が成立する。資金力のある富豪、資本家、華族、高級官僚らが恩典を受けることになった。移住者も急増し大農場ができるとその小作として移住する人も多かった。開拓使が設置された1869年には北海道の人口は5万8467人であったが10年後約22万人、20年後には約43万人、明治末期には約170万人になった⁽¹³⁾。

「開拓」移民が増大する中で、アイヌ民族は土地にたいして事実上まったく無権利状態となり、山林原野の伐採によって森がなくなり、動物も乱獲され、狩猟採集民族アイヌの生活圏は狭められた。そのため従来のような生活様式で生活していたアイヌ民族は窮乏に襲われ、飢餓に瀕することになった。アイヌの重要な食料であった鹿は開拓使の奨励事業によって乱獲され、明治中期にはほぼ絶滅寸前までになり、鹿を食糧にしていたオオカミも姿を消した。

■ 北海道旧土人保護政策法

1889年、「北海道旧土人保護法案」が帝国議会に提出され、翌年可決された。これによって、アイヌの人々に対し農業に従事することを前提に1戸につき1万5千坪（5ヘクタール）以内に限り土地を無償提供するとされた。しかし、相続以外の譲渡の禁止、開墾期間15年の制限などがあり、本来の所有権ではなかった。給与地で耕作可能であった土地は半分でしかなかった⁽¹⁴⁾。宮島氏は、保護を謳いながら実質的には、狩猟採集民族アイヌを強制的に農耕民化し、学校教育によってアイヌの民族性を剥奪して「皇国臣民」化することを意図したものであったと述べている⁽¹⁵⁾。

1896年「河川法」が制定され、北海道全域の河川が国家の管理下に置かれ、漁業への制限も行われるようになり、アイヌの主食としてきたサケを取ると「密漁」として逮捕されるようになった。移住した和人は、貧困のどん底で疲弊したアイヌ民族に出会って、それ以前の歴史や文化を知らないままに、それがアイヌ民族の姿であると誤解し、差別が始まったと宮島氏は述べる⁽¹⁶⁾。

■ アイヌ強制移住政策

サハリンアイヌの強制移住や北千島アイヌの強制移住が行われた。日高地方では、放牧に適し、開拓使長官、黒田清隆は、1872年に新冠、静内、沙流の三郡にまたがる約7万ヘクタールを開拓使の牧場に決定し、官営の放馬場を設置した。牧場を襲うという理由でオオカミの多くが殺され、アイヌの「神」が失われていった⁽¹⁷⁾。

日本の近代化の歴史は、アイヌの人たちが持っていた伝統的な狩猟採集民族としての生活様式や、文化・習慣の基盤を奪っていく歴史であった。明治政府が、北海道を対外的な防衛と食糧生産の拠点とするために「開拓」の方針を打ち出し、内地から植民を進めていくようになると、アイヌの置かれた状況は厳しいものとなっていく。同化政策が進められていく一方で、アイヌの土地の無償の取り上げが行われた。わずかに「無償供与」された狭い土地で、狩猟採集民族であるアイヌの人たちは慣れない農耕を強いられ、生活の基盤とともに、民族の文化とアイデンティティの危機に追い込まれていったのである。日本の近代化とは「西欧化」であり、西欧に追いつくために富国強兵政策を進めていくことを意味したが、アイヌの人たちにとっては、それは抑圧と差別の歴史に他ならなかった。

中井久夫は、『分裂病と人類』の中で、伝統的な社会が西欧社会との接触によって生じる急速な文化変容と精神障害の関係について論じ、「非定型精神病」の多発によって文化変容期が特徴づけられる社会は、被害者から加害者に転化する相対的に「強い社会」であるが、西欧社会との接触によってアルコール耽溺に陥る社会はこのような活力の更新を持たない「よりひ弱な社会」であるとしている。そして、かつてシャーマンを生んだ狩猟社会は、現在、西欧との接触によってアルコール耽溺者を大量に生み出していると述べているが、まさしく、近代化の歴史の中で、アイヌの人たちの辿った道がこれであった。

一方、西欧社会との接触によって、最初は被害者の位置に置かれながらも、やがて加害者の位置に自らの立ち位置を変えていったのが近代日本の歴史である。幕末に西欧近代と接触を持った日本は西欧からすれば「周縁」に位置する「非文明国」であった。しかし、日本は、明治維新を経て、西欧に追いつくために富国強兵政策という「近代化」の道を選択し、「一等国」を目指した。それは、「周縁」として位置づけを、「中心」に変えようとするものであり、それは同時に自らの周りに新たな「周縁」を作り出すことを意味した。それは、「被害者」から「加害者」に自らの位置を転じていくことでもあった。中井に従うなら、近代化していく社会、あるいはそれに適合していける社会は、ある意味で「強い社会」であるが、それは「加害者」ともなりうる「社会」である。ここに日本の近代化の光と影の問題が潜んでいる。

「強い社会」ではなく「よりひ弱な社会」であったアイヌの人たち社会は、近代化を進める日本の支配を受けることによって、生活の基盤を奪われ、貧困に陥り、差別を受け、アルコール依存者を多く生み出すようになっていったのである。「べてるの家」の宮島牧師や向谷地氏が当初、この地域で見て触れたアイヌの人々の悲惨な生活、アルコール依存で家庭崩壊し貧困にあえぐ人々の姿は、まさしく、この日本の近代化の被害者としてのアイヌの人々の歴史そのものであったと言えよう。このようなアイヌの人々の悲惨な生活に触れたことが、「べてるの家」の創生に大きな影響を与えていることは、宮島牧師も向谷地氏も認めていることであり、「べてるの家」が「弱さ」を認め、つながり合うという考え方を基礎においているのは、この地のアイヌの人たちの歴史と深くかかわりあっている。

筆者は、この日本の近代化が持っている矛盾が集積した負の地点から、「べてるの家」の「治療文化」が形成されてきたと考える。すなわち、アイヌの社会のシャーマン文化には、すでに見たように「治療文化」があり、それが同じくマイノリティである精神障害者の「治療の場所」としての「べてるの家」の「治療文化」の形成に大きな影響を与えたのではないかと考える。「べてるの家」の「治療文化」は、近代化の歴史が生み出した負を正に反転させようとする営みから生まれてきたものである。

次に、シャーマニズムを母胎として現れる現象とされるアイヌの「イム」という精神症状とそれの病氣治しのシステムについて述べていきたい。

4-3 アイヌの「イム」

「イム」とは精神医学において一つの精神症状として位置づけられているが、アイヌの人々の中では、必ずしも「精神症状」「精神障害」としてはとらえられていない。筆者は、何らかの意味で「イム」の文化が「べてるの家」の「治療文化」に影響を与えているのではないかと考えている。

「イム」については、中井が、文化依存症候群の中に位置づけているが、戦前に北海道大学精神医学教室がアイヌの地域調査研究を行っている。その中で明らかになった「イム」の実態についてそれに参加した精神科医の秋元波留夫氏が、戦後、報告している⁽¹⁸⁾。

秋元氏によれば、「イム」については、宣教師のジョン・パチュラー、ユーカラ研究で有名な金田一京助、医学者の関場不二彦、小金井良精の著述がある⁽¹⁹⁾。精神医学者ではじめて「イム」について報告したのは、九州大学精神医学教室を創設した榎保三郎教授で、痙攣性チックと同じ神経症としている⁽²⁰⁾。

「イム」を引き起こすきっかけはトッコニ（蛇）で、蛇に対する一種の反射行動（反応）で、精神医学の「びっくり反応」startle reaction である⁽²¹⁾。「イム」の共通症状は、恐慌症状（びっくりした途端に起こる叫声、攻撃、逃避）、反響言語および反響行為（相手の言葉、表情、動作、まわりの物音の反射的模倣）、命令自動（相手の命令の即時実行）、反対行為（命令と反対の行動。近よれと命令すると離れ、右に行けと命ずると左に行く。）、性的言動（汚言、性的露出）、などの組み合わせである。秋元氏は、「イム」は精神病理学でいうところの急激な心理的ストレスに対する防衛反応であり「神経系最高段階の解体現象」の典型であるとする。「イム」という言葉の意味をアイヌの人に聞くと、はっきりしないが、「こわがる」とか「まねをする」という意味だという人もいたと秋元氏は報告している。

秋元氏は、北海道大学精神医学教室の調査に参加し、1931年、平取で、「イム」の老婆の報告を行っている。秋元氏は、アイヌ人の吏員の案内でその「イム」の女性を訪ねた。その案内人がその女性に話している途中にいきなり「トッコニ」（蛇のこと）と大声でいうと、その女性は、

奇妙な声をあげて飛びあがり、一目散に駆け出したかと思うと、そばに積んであった薪をとって、何かアイヌ言葉で叫びながら投げつけてきたと秋元氏は報告している⁽²²⁾。

秋元氏は、「イム」の発現には、蛇をタブーとするアイヌ民族の伝統文化が最有力の要因であるとしている。個人的条件として、推感性（暗示をうけ易い性質）の人、その人の生活史での出来事があげられるが、それよりも大きいと考えられるのが、アイヌ社会特有の女祈禱師ドスに病氣治しのまじないをしてもらった時に、「イム」になることを条件としたという体験が関連しているとする⁽²³⁾。

ドスは、「イム」になると病気が治るといい、「イム」のすべてではないが、病氣治しという利益をもたらす場合がある。いったん「イム」になると、それから逃れることができないのも、ドスの託宣がその人にとって絶対的支配力を持つからで、まじないで「イム」になった人は、ドスというシャーマニズム信念体系の呪縛のとりこになっていると秋元氏は述べている⁽²⁴⁾。「イム」のなかには、ドスの託宣で「イム」イカイ（「イム」する神様）にとりつかれていると信じている人もいる。

ドスは、アイヌ社会で尊敬され、古い病氣治しをやって重宝がられているが、現在では数も減り、その社会的役割は昔ほど重要でなくなっている。「イム」は一時的な狂気であるが、愛すべき存在であり、酒席や座興に供せられることが多く、ピエロの役割を負わされている⁽²⁵⁾。

秋元氏は、「イム」もドスもアイヌ文化に色濃く残っているシャーマニズムを共通の母胎とした現象で、ドスは神がかり状態（トランス状態）、「イム」は「びっくり反応」と状態は違うが、意識の上部構造の機能麻痺（機能解体）である点で同じであり、この機能解体を生じる決定的要因がアイヌ民族のシャーマニズム文化であるとしている⁽²⁶⁾。

1932年から1936年までの5年間北海道精神医学教室は北海道・南樺太の広い範囲にわたって「イム」の調査を行った。その結果を1968年に報告している⁽²⁷⁾。秋元氏らの調査では、「イム」は地方によってその分布が異なり、最も多かったのが日高地方の平取を中心とする沙流川流域で、隣接する胆振がこれについていた。両地方あわせると確認された「イム」の90%近くが、この地方に集中していた。

アイヌ部落として有名であった白老（胆振国苫小牧近郊）では、「イム」は姿を消していたが、白老地方では、早くから和人の文化がアイヌの人びとの中に入り、多くの家では片言のアイヌ語すら話されることはなく、和人として生活しようとする傾向が強かったことが影響しているのではないかと秋元氏は述べている。その背景に明治以後の同化政策によってアイヌの文化継承が困難になったことがあげられる⁽²⁸⁾。他方、日高平取は、日本人と接触はあっても、アイヌ文化の伝統を守りつづけることができた地域であったことが、この地域に「イム」が残った原因ではないかと秋元氏は述べている⁽²⁹⁾。

「イム」と同じような型の「びっくり反応」は世界のいろいろな地域の原住民にあることが報告されているが、「イム」がアイヌ民族固有の文化と結びついているように、それらはさまざまな地域の原住民の「イム」類似病態は、それぞれの原住民文化を背景としており、形態は似ていても起こす条件は違い、「イム」のように蛇を反応惹起の主因として、女性に限って起こるというものはなく、「イム」はアイヌ民族に特有なものであると秋元氏は述べている。

比較文化精神医学の研究者はこれを「文化結合症候群 culture-bound syndrome」あるいは、「文化特異性症候群 culture-specific syndrome」と呼び、アイヌをその中に入れて⁽³⁰⁾。しかし、秋元氏は、「イム」をアイヌ文化と短絡的に結びつけることには疑問を呈するとともに、「イム」はその本人にとっては大変な苦痛であり、そこから免れたいと願っているものであり、精神医学からは心因疾患であり治療の対象で、根絶すべきであるとしている⁽³¹⁾。

秋元氏は、「イム」の減少にもかかわらず、戦後、民族文化の伝統一アイヌ語、独特の工芸、芸術などーの振興がアイヌの人びとによって進められ、生活も戦前に比べて改善して芸術家や研究者も生まれ、人口も秋元氏が調査した戦前よりも増加し、アイヌ民族と文化はよみがえっているのであり、「イム」がアイヌ文化全体と結びついたものではないとしている⁽³²⁾。

秋元氏は、「イム」を病気としてとらえ、「治療」してその苦痛を取り除くべきであるとしているが、その報告の中では、アイヌの人々には、「イム」には病気治しの力があると信じられ、女祈禱ドスという治療者が、病気治しのために「イム」になることを条件としているとされている。これはアイヌの文化の中にシャーマニズムの信念体系と関連した「治療システム」があることを意味している。「イム」と「ドス」は、アイヌの「治療文化」を形作るものであると考えられる。

筆者はシャーマンの文化の影響がアイヌの人びとの習慣や生活の中に残っているのではないかと考える。秋元氏らの参加した戦前の調査において日高地方は、北海道の他の地域に比べて、「イム」の文化が残っている地域とされたが、日高地方にある浦河町にも「イム」は今も残っている。筆者は、浦河町調査の中で、地域のアイヌの人から、「イム」を持っている人がまだいるという聞き取りを得た。「イム」は一時的な狂気であるが、愛すべき存在として酒席や座興に供せられることが多く、ピエロの役割を負わされているとされているが、聞き取りの中でも、「イム」がある人に起きると、周りは最初びっくりするが、その後、笑いが起こり、座が盛り上がるということであった。

「べてるの家」には笑いやユーモアの文化がある。筆者はミーティングに参加して、「べてるの家」のメンバーは突然、誰かが突拍子のないことを始めたり、突拍子のない言葉を発しても、それを咎めるのではなく、座の笑いとしていく文化が仲間のうちにあると感じた。このような文化はどこかでアイヌの「イム」の文化と繋がっているのではないかと考える。秋元氏は「イム」は病気でありその「苦痛」を取り除き、根絶すべきであるとしているが、筆者は「イム」は単に病気として「治療」の対象とするべきものではなく、それ自身が、何らかの形で「治療」の役割を持っているのではないかと考える。中井久夫氏の「治療文化論」に引きつけていうならば、「イム」は、アイヌのシャーマン文化の特性を示すものであり、それは、治療者と患者が同一である「内治療的」な「治療文化」を構成する要素であると考えられる。「べてるの家」の「治療文化」は、このアイヌの「治療文化」の影響を受けているのではないかと考える。

5 北海道浦河町の近現代史

5-1 入植期とアイヌの人びと

「うらかわ」という地名は、アイヌ語の「ウララベツ」（霧深き川の意味）から転訛したとも伝えられている。当時は松前藩によって浦川場所（会所）が設けられ、主として漁業による交易が行われて、「浦川」という地名で呼ばれていたが、開拓使時代に「浦河」という現在の地名になる⁽³³⁾。

浦河町は、もともとアイヌの人びとが生活していた場所であった。『新浦河町史』によれば、明治以前の浦河は、アイヌが海岸線沿いに集落を形成し、「場所」に支配人、通辞、帳役、番人など数名の和人が派遣されているにすぎなかった。浦河村に文久・慶応の頃（1861～1868）自分稼ぎと称する者が6名いたが、その内の2名が永住人になり、これが「和人」定着の始まりであるとされる⁽³⁴⁾。

肥後国（幕府直轄地）天草郡より19戸・93人（天草団体）備前国（大村藩）彼杵群より24戸・74人（大村団体）が入植した。彼らが入植したとき浦河の海岸には旧松前藩の会所跡が開拓使庁の出先役人が執務している役所が二軒、漁場を経営する「和人」の民家が二軒、ほかはアイヌの

人々の草屋根住居が点在していた。天草団体が入地した杵臼の自然は、幌別川とその支流の川沿いにアイヌの草小屋が点在し、アイヌの徒歩や馬の取った跡がわずかに川沿いにあり、見渡す限りの原始林で、熊、鹿、狼、きつね、うさぎが見られた⁽⁸⁵⁾。

また、大村団体24戸、74人が西舎に入ったとき、果てしなく続く原始の密林と背丈に伸びた茂草により、文字どおり開墾の業は並大抵のものではなかった。幌別川とその支流の川沿いに点在するアイヌの草小屋があり、移民たちは開墾に精励し、アイヌたちは漁労と狩猟に明け暮れる生活を営んでいた。やがて両者の交流が始まり、移民はアイヌたちに狩猟の方法を学び、野草の食用の知識を得る⁽⁸⁶⁾。

明治4年の浦河郡は434人であったが、そのうち「土人」と戸籍に記されていたのが、29軒163人（内訳は、ムロベツ村19軒105人、ウロコベツ村10軒58人）であった。その他、永住人7軒33人、移住農民44軒166人、引越番人3軒13人などであった⁽⁸⁷⁾。

明治5年（1872年）三好清篤主任が札幌の会議で日高開発の大理想について提言し、浦河支庁官吏が「移民をして郷里同様の念を発せしむる様努むべきこと、産物会所を開き密売を防止すること、築港のこと、移民並にアイヌの教育を興すべきこと」と提言した⁽⁸⁸⁾。明治政府の開発とアイヌの同化政策が浦河においても進められる。

『新浦河町史』によれば、浦河の人口変化は、明治14年、浦河11村戸数31人、人口1,611人であったのが、明治24年には本籍人員2,612人になっている。アイヌの人口は、明治25年戸数209戸、人口1,226人であった。明治27年（1894年）ころより移住者がさらに増加し、明治35年（1902年）には、浦河は、1,370戸 8,400人ほどの町村であった。明治45年（1912年）の浦河の戸口は、戸数1,266戸、人口6,330人となった⁽⁸⁹⁾。

5-2 キリスト教開拓団「赤心社」の入植とアイヌ

明治10年代、北海道に旧藩主による旧家臣土族の募移民団体、土族授産をその設立の主要な契機の一つとした会社組織の移住団体、土族もしくは豪農の先導に基づく農民移住の先駆的団体などによる開拓が進められる。

浦河にも「赤心社」が開拓団として入植する。「赤心社」は、民間事業家が計画書や定款を作って資金を公募し、いわば近代企業として北海道開拓を企てた最初の事業であった。「赤心社」の趣旨は「無産無資の貧人」がそれぞれ小額の株金を積み立て、その力によって北海道開拓の事業を行うというもので、株式会社とは言いながらも、単なる利益追求の団体ではなく、むしろ「報国の赤心を奮起する」という自らの事業を発展させることを通じて国家を繁栄させることにその目的があった。「赤心社」の入植として、明治14年、第一次移民50人余り、翌年、第二次移民80余人が元浦河に入った⁽⁹⁰⁾。

「べてるの家」の始まりに関わり、その命名者であった宮島牧師は、この「赤心社」について次のように記している。「赤心株式会社」は、1880年に神戸でキリスト者を中心となって結成され、その翌年から9年間に約200名が北海道に移住した。創業当初は、「赤心社」の幹部は全員キリスト者でほとんどが藩組織が解体したのちの旧土族であった。1884年「学校兼会堂」を建て、1週間のうち、6日間は子どもたちを教育する私立の「赤心学校」として用い、日曜には「安息日集会」として礼拝した。入植して5年後の1886年に教会が設立され、名称を「浦河公会」とした⁽⁹¹⁾。初代牧師は、「赤心社」出身の人が洗礼を受けて就任した。1898年に「浦河公会」は「元浦河組合基督教会」と改称し、さらに宗教団体による教会合同に伴い1941年「日本基督教団元浦河教会」となり、1986年に創立100年を迎えた⁽⁹²⁾。

宮島牧師によれば、「赤心社」が移住する4年前の1877年に荻伏地域のアイヌは、戸籍法によっ

て強制的に創氏改名させられたうえ、戸籍に編入された記録があるという。そのときの荻伏村のアイヌ人口は413人であった。また、荻伏村の地名のほとんどはアイヌ語であったという。また「赤心社」が北海道開拓使より百万坪（約333ヘクタール）の払下げをうけた土地には、アイヌの墓がいたるところにあって、開墾すると人骨が出てきたので、アイヌの代表と話あって墓地を定め、骨を集めて葬ったと伝えられている⁽⁴³⁾。

宮島氏によれば、「赤心社」の指導者たちが模範としたのは、17世紀に「新天地」を求めてアメリカに移住し、マサチューセッツ州周辺にコロニー（植民地）をつくった会衆派のピューリタンたちであった。宮島氏は、「赤心社」の「理想郷」とは移民団だけの閉ざされた世界であり、その教会は、「開拓者」の精神的な支えとして存在していたが、豊かな森や川や土地を奪われて狩猟民族として生きる道を閉ざされ、貧困と差別のどん底に追いやられていたアイヌ民族には無関心であったと批判している。そして、キリスト教精神にとって理想を掲げた「赤心社移住団」も、明治政府によるアイヌシモリ植民地化・アイヌ民族同化政策の流れの中にあったとする。宮島氏は、「赤心社」幹部たちはキリスト者であるとともにナショナリストでもあり、国家への献身と信仰とを同心円でとらえていたと批判的にとらえている⁽⁴⁴⁾。

宮島氏は、元浦河教会100年記念誌の中で次のように述べている

移民たちの精神的支えとして機能した教会は、森や川や土地を奪われ、劣った民族劣った人間であるかのように「土人」と蔑称され、生存そのものさえ脅かされていた隣人アイヌに対して、どのように関わっただろうか。

元浦河教会は、北海道でアイヌの人口の最も多く暮らしている日高の地に百年にわたり存在しつづけてきた。しかし、教会の記録からも、赤心社の記録からもアイヌ民族への働きかけについては、ほとんど見るべきものを見出すことができない。

教会のたっているこの大地には「開拓」という美名のもとに生存権さえも奪われて憤死していった先住民アイヌの血がしみ込み、骨が埋まっている。この大地で宣教する教会は、その土の中から叫んでいる「血の声」（創世記4・10）に聞く耳をもたなければならない。また、この大地で、囚人労働者やタコ労働者が苦役し、強制連行されてきた朝鮮人・中国人が、虫けらのように殺されていった民衆の歴史があったことを忘れるわけにはいかない。今、元浦河教会の百年の歴史をふり返るとき、教会はこれらの民衆とどのように関わり、どのような連帯をしてきたのか、主のみ前で激しく問われていることを思う⁽⁴⁵⁾。

宮島氏は浦河町のアイヌ文化の歴史について次のように書いている。

浦河町の東には、「乳呑川」が流れその河口には小高い岩山があるが、昔からアイヌの人たちは、その山を「チノミシリ」（われら祈る山）と呼んできた。その川の上流に老人ホームがあり、浦河タレさんが入所していて、その地域でアイヌ語を話せる数少ない人の一人で、口のまわりにアイヌ女性の伝統であったシヌエ（入墨）をしていた。その女性が宮島氏に語ったところによれば、その山は、各部落（コタン）のユカシ（長老）方が集まって、ヌサ（祭壇）こしらえて、そこでカムイノミ（神への祈り）を1年に2回か3回行った⁽⁴⁶⁾。

5-3 アイヌ民族と朝鮮人のつながり

「べてるの家」の向谷地氏は、浦河は、戦前の強制徴用で十勝に強制労働に従事させられた朝鮮人が、戦後日高山脈を越えて、アイヌの集落であるコタンにかくまわれ、家族を形成してきた

という歴史があり二重の差別があると述べている⁽⁴⁷⁾。

北海道の朝鮮人とアイヌの人の繋がりは石純姫氏の聞き取り調査によって明らかになっている。石純姫氏によれば、北海道に移住した朝鮮人と先住民であるアイヌ民族の間には深い繋がりが形成され、マイノリティのアイデンティティの複雑に交錯が見られるとしている。石氏の調査によれば、北海道における朝鮮人の移動は、通常考えられている植民地化された1910年よりもかなり遡るものであり、前近代期からのアイヌ民族との深い繋がりが大きな要因として考えられるとしている。戦時期の労務動員以前に日本に移住した朝鮮人は、戦後も日本に定住することになる場合が多く、特に北海道においては、定住化の形成過程とアイヌ民族との間には深い繋がりがあるとしている。アイヌ文化を伝承する朝鮮民族の女性も少なくないとしている。石氏は、平取や静内、新冠における調査から、北海道における朝鮮人とアイヌ民族との繋がりは、前近代期から戦時中だけでなく、戦後も、より密接な関係を築いていることが明らかになり、マイノリティ社会の中でも、さらに複雑な連帯と抑圧と排除が再生産されているとしている⁽⁴⁸⁾。

石氏は、2012年度に、平取町におけるアイヌの人からの聞き取りを中心に、静内、新冠における聞き取りを行い、2013年度には、平取町、札幌、千歳などで調査を行い、2014年度には、淡路・鳴門地域、韓国済州島、平取町での調査を行っている。石氏の調査報告によってアイヌの人が朝鮮人を助けたという事実を確認できる。

ここでは、浦河町に生まれた女性のアイヌの人から、石氏が聞き取ったものを筆者が少し整理して紹介していきたい。これは、浦河の地でアイヌ人が受けてきた差別の証言記録でもあり、本論文との関わりで重要であると考えられるので、朝鮮人との関わり以外の部分も少し長くなるが紹介していきたい。ヒアリングは2012年8月14日、静内で行われている。

女性は、浦河杵臼コタンで1933年にアイヌとして生まれた。杵臼コタンは、九州の天草から移住して、鋳入れしたコタンである。日高でも静内側、幌別側は有名な大川があり、そこは、朝鮮の人もずいぶん苦勞して殺されたり生かされたりして入ったところである。汽車で材料を運ぶために、その線路や土手を作るのに、人が働いていたが、朝鮮の人たちもそこで生き埋めにされて、夜になればオーイオーイという泣き声もよく聞こえたとハボ（おばあさん）からもよく聞いた。

昔はアイヌだけが住んでいた高台の平らな何百町というところを、天皇の牧場に作るからと言われ、そこを立ち退かされ、大川のへりに追われた。女性はそこで生まれた。天草から来たシサム（和人）の人たちは、鋳入れをしていて、アイヌの人も鋳入れをしていた。しかし、その女性の母は、一丁五反の土地をシャモでただで取られてしまった。その女性の部落には、人が良いのか、何もわからないからそうしたかわからないが、ハンコをただ貸してやって、判をつけて、土地を取られた者が多くいた。

女性は6歳の時、母に連れられ学校に行った。3年生になった時、大東亜戦争が始まった。教育も軍国主義が入ってきた。運動会のときに踊りをやることになったが、手をつなごうとしたらつなぎたくないと言われた。手をつないでと言ったら、「アイヌとはつなぎたくない」「アイヌなんかくさいから嫌だと」と言われた。自分がアイヌであることは、近所に口染めたハボやエカシがいたので、知っていたが、その時、自分がアイヌであること思い知らされた。アイヌは犬、ポチ、ポチ来いって口笛を吹いて犬を呼ぶように言われていた。作文が好きだから作文で優を取るとアイヌのくせにと言われて、鉛筆を折られたり、ノートを破られたりした。

戦争当時は学校で歌う唱歌は、軍歌が多く、アメリカ人を殺してしまえというような歌詞の内容であった。その女性は、アメリカ人もロシア人も朝鮮人もみんな同じであると考えていたので軍歌を歌いたくなかった。それはその女性の母親からの影響であった。その女性の母は、神様信

仰をして人を救っていた。その母親は次のように語っていた。日本人ばかりが神様の国ではなく、アメリカも朝鮮も中国もみんな神様の子である。神様はどの子もかわいいと思っている。殺し合いをしても、解決するのは神様である。そのように聞かされていたから、その女性は学校で軍歌は歌いたくなかった。

女性の母は、亡くなる前に、その女性に、杵臼の墓に、札幌から医者が3人来て、杵臼の若い人に頼んで、先祖の墓みんな掘って、穴だらけになったことを覚えているかと聞いた。自分は84歳まで生きたからいつ死んでも悔いはないが、先祖の墓を掘られたことをずっと申し訳なく、「死んでも浮かばれない」と思ってきた。母親はその女性に、北大を訴えて、骨もタマサイも刀も取り返し、罰金を取り、その罰金で、世話になった人にお礼をし、残ったお金は、孫たちに、先祖の墓を掘った北大の医者たちからの罰金の金だと言って渡すように遺言した。そして、昔からアイヌはシャモに困ったから助けてくださいと言った者はいない、これは伝え聞いてきたことだから、このことをよく覚えておくように言った。

さらに、その女性の母は、昔、内地のシャモたちが舟で来て、アイヌの12、13歳の子どもたちを、内地で小遣いや着物をやるから畑の草取りをしてくれと言って騙して集団で連れ去った話を語りだした。行った先では、朝から晩まで使われ、娘はいたずらされ、腹が大きくなれば、その子どもは、母親に抱かせもせず、見せもせず、山だか川に投げられた。その女性はその時のことを歌ったヤイサマを知り合いから習った。ヤイサマとは本当にあったことを歌うものである。ヤイサマを歌うときは、口染めしたハボたちがみんな手を繋いで、哀れな声で、節をつけて泣きながらその物語を悲しく歌った。その女性はそのヤイサマを浦河の公民館でも何百人の前で解説しながら歌ったことがある。

明治の終わり頃から大正の頃には、和人が来て内地の東北あたりの農家にアイヌの若い女性を連れて行った。連れ去られた者は帰って来ず、そこで40にもならないうちに死んだ。そのような話を連れて行ったシャモが、戻ってきて話す。その話から、アイヌの人たちはヤイサマを作り、連れて行かれた人も向こうでそれを歌った。その歌は、「ハコガーサペー、ハコガーサペー、おらのコタン、おらのコタン、おらの村、ハボガサペー、ハチャガサペー、父ちゃんも母ちゃんもそこさ行きたいな。海越えて山越えて鳥のような羽があったら、おら飛んでいきたいでって。」という意味のものであった。

朝鮮の人はいじめられ可哀そうであった。アイヌと朝鮮人は哀れなものであった。アイヌの人は、朝鮮人の人が逃げてきたら家に泊めて匿い、朝暗い間に、逃がしてやった。朝鮮人の人は不思議なことに、アイヌの家に助けを求めにやってきた。

その女性の妹の夫の妹が朝鮮人と結婚している。その朝鮮人の人はお金があった。その人は、名古屋に行った。その女性の妹は、浦河でアイヌ、アイヌと馬鹿にされるのが嫌で、知らないところに行きたいと、夫の妹を頼って、名古屋に行き、シャモのふりをして生活し、アイヌ協会にも入らずに、そこで死んだ。その女性は、妹がそのように浦河を出ていかなければならなかったことに腹が立ち、それが原因で、アイヌとしてあちこち出ていくようになった⁽⁴⁹⁾。

このヒアリング調査から、浦河町においても差別されてきた朝鮮人とアイヌの人のつながりと助け合いの事実があったことを確認することができる。それは、地域の多数派から排除され、差別されたマイノリティ同士の繋がりである。それを差別され、排除されるからこそ、そのような繋がりに助けを求めざるを得なかったというように、排除の構造から理解するのも一つの視点であるが、抑圧され排除される者同士が、さらに差別と排除の構造を再生産してしまうのではなく、互いに助け合う関係、助け合う文化を形成していたことに意味を見出す視点もある。本論文は後

者に重点を置くものである。

この浦河の地域におけるアイヌと朝鮮人の助け合いの経験とその文化が、戦後も潜在化したものとして継続し続け、それが「べてるの家」の「弱さのつながり」という「治療文化」の中に顕現化しているのではないかと考える。

アイヌの人と朝鮮人との繋がり歴史は、北海道、浦河という地が持っている歴史的・地理的な「周縁性」と「場所性」の問題と「べてるの家」との関連を問うという本論の主題とも深くかかわってくるものであり、「べてるの家」を理解するうえで押さえて置かなければならない点であると考える。

5-4 大正から現代までの浦河町の歴史と産業

大正期に入ると函館・日高線命令航路が開設され、浦河に根室銀行支店が開設された。浦河・サルタ間のバス路線開業し、北海道自動車協同組合が設立された。人口は、大正末期には、浦河、荻伏を合わせて1万人を超えるようになる。

昭和に入り、浦河港の完成や鉄道の開通、水道の設置、浦河実践女学校（浦河高校の前身）の設立、日赤浦河病院（現在の浦河赤十字病院）の開院などが進んだ。戸数・人口ともに徐々に増加した。昭和5年には、1万2618人（浦河町 荻伏村合計）、昭和10年には、1万6181人、昭和15年には、1万4138人となった⁶⁰。戦後は農林水産業を中心に復興が進み、順調に人口が増えていたが昭和34年をピークに減少するようになる。農業の機械化や200海里漁業水域制定による漁業水域の減少など産業構造が変化し、雇用の場を失った若年層が職を求めて都市へ流出したためである。浦河町内の官公庁や企業の合理化や縮小、廃止なども人口減少の原因である⁶¹。

人口は戦前から戦後にかけて戦争中を除いて増加をし、昭和35年には21,915人でピークとなる。しかし、その後、減少に転じ、昭和55年には2万人を割り、19,408人となり、その後も減少が続き、平成23年には13,974人となっている。高齢化率は、平成23年には、25.9%となっている。平成21年から後期高齢者が前期高齢者を上回っている。世帯数は昭和35年には4,709世帯であったが、平成20年には6,975世帯で1世帯あたりの世帯員数2.01人、人口動態は、平成20年で自然減が29人、社会減が318人で、全体で337人の減少となっている⁶²。

産業の動向を見ていくと、第一次産業の従事者が、昭和25年には5,272人であったが、以後減少が続く、平成17年には2,122人になっている。農業従事者が、昭和30年の3,774人をピークに以後減少し、平成17年には1,561人になっている。漁業従事者も、昭和25年には1,485人であったが、その後減少、昭和40年には少し上昇したが、以後長期に減少を続け、平成17年には518人になっている。

第二次産業の従事者は平成60年の1,877人から減少し、平成17年には1,256人（構成比14.9%）となっている。工業の事業所数も平成13年の43から平成19年には35に減少している。出荷額は67億2,838万円から平成19年には40億5,067万円に減少している。商店数は平成14年の234から平成19年には212に減少し、小売業も206から189に減少している。従業者数も1,232人から1,027人に減少、販売額は203億円から158億円へと減少している⁶³。

浦河の財政状況は、平成25年度予算では一般会計が歳入83億2,800万円で、うち自主財源が30.5%（町税17.0%等）、依存財源が69.5%（地方交付税が42.3%国庫支出金が6.9%、町債が12.3%等）となっている。平成21年国民健康保険事業特別会計は、1億5,900万円の赤字となっている。地方債残高は111億1,196万円である⁶⁴。

このように浦河の町は、現在、人口が減少して、過疎化が進み、地場産業である漁業や商業が停滞し、高齢化が進む地域となっている。町の財政状況も依存財源の占める割合が7割近くであ

る。地域の過疎化は日本の地方が抱えている問題であるが、浦河もこの問題が進行しつつある。それは日本、そして北海道の中でも周縁という位置に浦河が置かれていることを意味する。

注

- (1) 宮島利光 『チキサニの大地 アイヌ民族の歴史・文化・現在』日本基督教団出版局
1994年 pp.3-4
- (2) 同 p.23
- (3) 同 p.27
- (4) 宮島利光 『アイヌ民族と日本の歴史』三一新書 1996年 p.40
- (5) 同 pp.41-45
- (6) 宮島利光 『チキサニの大地 アイヌ民族の歴史・文化・現在』 p.43
- (7) 同 pp.79-83
- (8) 同 pp.88-90
- (9) 同 pp.106-108
- (10) 同 pp.109-118
- (11) 同 p.118-124
- (12) 同 p.126-128
- (13) 同 pp.126-138
- (14) 同 p.142-146
- (15) 同 p.152
- (16) 同 pp.138-140
- (17) 同 pp.175-176
- (18) 秋元波留夫、上田敏 『精神病を病むということ』
第四章 文化の中の精神医学 アイヌの「イム」の研究 医学書院 1990年
pp.159-169
- (19) 同 p.159
- (20) 同 pp.159-160
- (21) 同 pp.161-162
- (22) 同 pp.160-161
- (23) 同 p.163
- (24) 同 p.164
- (25) 同 p.164
- (26) 同 p.164
- (27) 同 pp.160-161
- (28) 同 pp.164-165
- (29) 同 p.165
- (30) 同 pp.166-167
- (31) 同 p.167
- (32) 同 pp.166-169
- (33) 浦河町ホームページ 沿革より
- (34) 『新浦河町史』上 編集 浦河町町史編さん委員会2002年
発行 北海道浦河町 株式会社 ぎょうせい p.290

- (35) 同 pp.201-202
- (36) 同 p.207
- (37) 同 p.290
- (38) 同 p.184
- (39) 同 pp.291-292
- (40) 同 pp.208-211
- (41) 宮島利光・岩崎孝志・山口陽一・辻浦信生
『21世紀ブックレット 25アイヌ伝道等をめぐって 日本宣教の光と影 信州夏期宣教講座編』いのちのことば社 2004年 p.11-12
- (42) 宮島利光編『元浦河教会創立百周年記念誌』p.2
- (43) 宮島利光編『元浦河教会創立百周年記念誌』日本キリスト教団 元浦河教会1988年 p.3
- (44) 宮島利光他著 『アイヌ伝道等をめぐって 日本宣教の光と影』 pp.12-15
- (45) 宮島利光編『元浦河教会創立百周年記念誌』p.5
- (46) 宮島利光著『チキサニの大地』p.224-225
- (47) 向谷地生良著『「べてるの家」から吹く風』いのちのことば社 2006年 pp.14-15
- (48) 石 純姫 「北海道における朝鮮人の移住 アイヌ民族とつながりにおける重層的アイデンティティ」
2012~2014年度 科学研究費助成事業中間報告書 基盤研究C pp.1-2
- (49) 同 pp.39-47
- (50) 『新浦河町史』上 p.293
- (51) 『新浦河町史』上 p.294
- (52) 『新浦河町史』上 p.295 浦河町 統計要覧 平成20年度版
(浦河町ホームページより)
- (53) 『新浦河町史』上 p.296 浦河町 統計要覧 平成20年度版 より
- (54) 浦河町 平成24年度 財政状況資料集 浦河町ホームページ